

2025年度 卒業式 式辞

ご卒業おめでとうございます。

皆さんをお送りするに際して、新約聖書の一節についてお話をいたします。私たちの日常には、時に、「心が疲れ、場合によっては 心が折れてしまう」ことが起こります。そんな時、イエスは私たちにどのようなメッセージを送っているのでしょうか。

マタイの福音書は、次のようなイエスの言葉を伝えています。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和で、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

ここで登場する「くびき」とは、牛や馬の首にあてて、そこに、荷物を載せた車をつないで、ひかせたり、農機具をつないで畑を耕す木製の道具です。

今日、「くびきを負わせる」という言葉は、「束縛する」「拘束する」などという意味で、くびき自身が悪いものであるように使用されることが多いようです。それはなぜでしょうか？

くびきは、本来、荷物を「引きやすくする」ための道具です。そして、荷物を引きやすくするために、それをつける動物の体格や力に合わせて作られるものです。

しかし、くびきには出来の良しあしがあり、場合によっては、それぞれの動物の体の特徴に「合っていないもの」があります。そのようなくびきは、荷物を引きにくくさせるばかりか、くびき自体が動物の体を痛めつけ、結果として、重荷をさらに重いものとする原因にもなります。

現代的なたとえを使うならば、荷物を背負うとき、その荷を入れるリュックサックの「種類」によって、荷物の負いやすさが異なってくることを経験したことがないでしょうか？

くびきの良しあしは、リュックサックの良しあしに似ています。

イエスが生きた時代のユダヤの人々は、彼らの社会に網の目のように張り巡らされた「律法」という決まりを守ることを義務付けられていました。日常の活動の一挙手一投足が、律法でこと細かく決められ、日々営む労働は、彼らにとって大きな重荷となっていました。

イエスの目に、それは、まるで、体に合わないくびきをつけられることによって、引く荷物の重さがより重くなって苦しむ動物のように映ったことでしょう。

どの時代に生きようとも、すべての人間は、自らに課せられた仕事、役割を果たす責任を抱えています。しかし、場合によって、同じ仕事、役割でありながら、それを遂行する際のつらさや苦しみが必要以上に深く、重くなる場合があります。

日々の仕事を果たす中で、仕事や役割の意味の分かりにくさ、その仕事にかかわる人々とのトラブル、その仕事に向かう方向性の不安など、「なぜ、自分がこんな役割を担わなければならないのだろう」「人として、自分はこんなことをしてよいのだろうか」などと言う思いが頭をよぎること。そして、そのような思いにとらわれるとき、自分が負う荷の重さが何倍にも増加するかのよう感じられ、足がすくんでしまう経験はないでしょうか。

これは、つけられているくびきがゆがんでいるために、動物たちの荷を負う苦しみが増えてしまうのに似ています。そして、この世界には、様々な意味で私たちを痛めつけるくびきがあちこちに存在しているだけでなく、私たちは知らぬうちにそれらの「合わない」くびきを身に着けている可能性があるのです。

このようなくびきを身に着けているために、重荷をさらに重くしている人間に対してイエスは、「私のくびきを使いなさい、なぜなら、私のくびきは負いやすいから」と言っています。

この言葉を通じてイエスが示唆したことは、次のようなことではないでしょうか。

仕事や役割は、一方で、それを果たす意味が見いだせず、自分の人生や世界の破壊につながる時、それを担う人間にとって耐え難い苦痛ともなります。しかし、もう一方で、同じ仕事や役割でも、それらを担うことの意味に人間として心から同意し、それらを通じて開かれるより良い未来への希望があるとき、背負う重荷は、人間であるからこそ経験しうる特別な喜びをもたらす材料となりうるということです。

イエスは、重荷を背負う人に対して、「その重荷を背負わなくてもよい」とは言っていません。人間が、この世界をより良い形で構築し続け、前進させるために、私たちは、各々（おのおの）に求められる荷を担っていく必要があります。

であるならば、イエスのくびきを使うこと、つまり、イエスのくびきによって、私たち一人一人が荷を負う「意味と方向性」を、自分を含めたより多くの人々の喜びの増進に向けることで、荷は背負いやすくなり、「荷を負う」という一見「つらいだけ」の行為が、逆に、深い幸いの源ともなる、ということイエスは伝えようとしたのではないのでしょうか？

しかし、それでもなお、荷の重さに動けなくなることもあるでしょう。ここに、くびきのもっと大切な特徴があります。

くびきのもう一つの特徴は、2頭の動物を「つなぐ」ことです。つまり、くびきは、2頭の動物が荷物の重さを分かち合い、協力して進むための工夫でもあるのです。

ひとつのくびきで結ばれることによって、二頭が同じ方向に向けて力を合わせるだけでなく、一頭の歩みが弱くなったとしても、もう一頭がささえることができるのです。

心が落ち込むとき、往々にして我々は、一つの錯覚に陥ります。それは、その重荷を自分が「一人だけで負っている」という錯覚です。そして、その錯覚が生み出す孤独感は、背負っている荷をさらに重く感じさせることは誰もが経験することではないのでしょうか。

しかし、イエスのくびきのたとえは、重荷を負うとき、必ず、ひとり以上の仲間が、同じくびきを共にしているはずであることを思い出させてくれます。

そして、人間たちが、くびきを一緒に背負い続け、そのくびきを、互いに背負いやすいものにするためにたえず工夫する使命を帯びていることを「学べ」と言っているようにも感じられるのです。

先日のオリンピックのフィギュアスケートで、最有力候補と目されていた日本代表の木原・三浦ペアが、ショートプログラムで大きなミスをおかし、その時点での順位が第5位となってしまいました。その演技が終了したときの木原選手は、氷の上でうずくまり、文字通り、心が折れてしまったようでした。しかし、木原選手は翌日、しっかりと立ち上がり、三浦選手と共に金メダルへつながる演技をします。そして、その後の様々なインタビューを通じて、その快挙を可能にしたのは、パートナーである三浦りく選手はじめ、共通の目標に向けて同じくびきを背負っていた仲間たちの助けだったということが明らかになってきました。

私を含めて多くの人々が感動したのは、りくりゅうペアの、あのすばらしい演技だけではなく、その結果に至る厳しい道のりと、その道程で立ち尽くし、心折れて歩けなくなったメンバーを互いに肩を組んで支えあい、立ちあがらせた「絆の力」だったのではないのでしょうか。

しかし、場合によっては、くびきを共に負う仲間が見いだせないときもあるかもしれません。その時にこそ、いつ、どんなときにもくびきを共に背負っている存在が、必ず、「もう一人」いることに、気づいていただきたいのです。それがイエスです。

神であるイエスは、私たち一人一人に荷を負いやすいくびきを与えてくれるだけでなく、絶えず、そのくびきの片方をともに担ぎ、進むべき方向を示し、歩みを助け、励まし続けてくれる存在なのです。

イエスは、また、心が折れて、立ち上がれなくなっている我々を鞭打って歩かせようとするのではなく、まず休ませます。それは、いったん立ち止まって息をつくことで、再び歩くことができるように心を回復させるいくつかの工夫です。

心が傷付き、折れてしまったら、まず、私の所へ来て、息をつきなさい。私があなたの心の傷を回復させましょう。そして、癒された心で、わたしのくびきを身に着け、あなたの人生にとっての「荷を負う意味」を見直さなさい。そして、そのくびきの一方を絶えず私が担って、歩みを助けていることを忘れずに、もう一度一緒に歩き出しましょう。イエスは、こう言っているのではないのでしょうか。

キリスト教のメッセージの中心は「Dominus Te Cum : 主はあなたと共にいる」、つまり、「神がいつも私たちとともにいる」ということです。

これからの皆さんの人生において、様々な重荷を耐えがたく感じる時が来るかもしれません。そんなとき、くびきによって共にその荷を背負う仲間たちの存在と、なによりも、そのつながりを促し、はぐくみ、自らもその一翼を絶えず担い続けるイエスの姿を思い起こしていただければと思います。

卒業おめでとう、幸せな人生でありますように。